『モイラ』再読のこころみ（4）

― ジョゼフの《violence》の分析を中心に ―

井　上　三　朗

目　次

0．はじめに
1．神への志向
2．肉なるものへの志向
3．《violence》と信仰との関連
(1) 〈火〉（または〈光〉）のイマージュ
(2) 二つのviolence？
(3) 宗教的高揚と肉体的高揚とのあいだの揺れうごき
(4) 宗教的高揚と肉体的高揚との混淆
(5)《violence》再々考
(6) 犯罪後のジョゼフ
(7) 救いの問題
(8)《violence》と信仰との関連
4．おわりに

（太字は今回掲載分）[67)]

3．《violence》と信仰との関連

(7) 救いの問題

ジョゼフは肉体の罪をおかし、さらに人殺しと化す以前、しきりに人びとの救いのことに思いをはせていた。そして純粋志向・ピュリタニスム的態度を有し、二元論的世界観をもつジョゼフにおいては、「この世は神から見棄てられている」(I-14,p.75)のだという認識が圧倒的に優勢であり、この認識が、すでに検討した伝道熱をもたらしていた。また、ジョゼフはサイモンの死を知ったとき、「サイモ

ンのために祈るのはこれからは無駄なことだ。サイモンはもう裁かれているのだ」(II-6,p.104)と考えている。二つのあやまちをおかすまでのジョゼフの最大の関心事は救いの問題であったといっても過言ではないだろう。では、ジョゼフじしんは救われるのだろうか。あるいは救われないのだろうか。この問いは、『モイラ』を読みおえた大方の読者がいだく素朴な疑問であると思われる。

この点にかんして、私たちはまず、救いか滅びかについての裁きをくだすべき当事者の神が、この作品においてはほとんど登場しないことを指摘しておきたい[68]。第二部第二十三章のエピグラフとして、ロバート・ブラウニング(Robert Browning)の、「されど神は一言も洩らし給わず」(p.177)という詩句がかかげられていることは象徴的である。作者グリーンも『モイラ』を評して、「この小説の中で、神は話すことはない。というのも神は小説の登場人物ではないし、それに、一人の人間の人生において神が姿をあらわすことはきわめて稀であるから」[69]と述べているように、神の沈黙さらには神の不在が、この小説の基調となっているのである。それゆえ、ジョゼフが救われるか否か、についての絶対的な確証を得ることは困難であるし、不可能であるとさえいえる。

しかしながら、作品における神の沈黙はまさしくそれじたいによって、逆に神に語ってほしいという願いを読者にいだかせるし、また、神の不在は逆に神が存在してほしい、神の愛がジョゼフにそそがれてほしいという熱望をかきたてるにちがいない。第二部第二十五章において、ジョゼフからモイラ殺害の告白をきいたとき、デーヴィドが流す悲しみの涙はもちろんジョゼフへの篤い友情に根ざしている。しかしこの涙には、ジョゼフほどの熱烈な信仰をもつ人間がどうして人殺しをしなければならなかったのか、という無念さの感情が、さらにくわえて、神の沈黙にたいする悲しみとともに、ジョゼフの救いを切望する気持ちがこめられているはずなのである。そこで私たちは以下において、ジョゼフの救いの可能性を示すと思われる若干のしるしを取りあげ、検証してみたい。

まず最初に、〈雪〉のイマージュを分析することからはじめよう。〈雪〉は、作品において、第二部第二十章の時点、ジョゼフが肉体のあやまちをおかす前、つまりジョゼフがデーヴィドに伝道熱を打ち明けるときからみいだされる。ジョゼフが熱狂的な信仰を披瀝しはじめた際、デーヴィドは外の〈雪〉に注意をうながしている。

「—ごらん、雪が降っているよ。

たしかに、細かい雪片が、かろうじて見わけられる黒い木の枝々のあいだを、灰色

の空からゆっくりと舞いおりていた」(II-20,p.158)。

この〈雪〉は、第二十一章・第二十二章を経て、第二十三章の途中、翌朝の九時十五分まで降りつづけている。第二十三章の、雪にかんする記述をみておこう。

「外はもはや雪は降っていなかった。(‥‥) ジョゼフが教室の中に入ったとき、まだ雪はふっていた。しかしほんのしばらく前から、もう雪はふりやんでいた。そしてジョゼフの頭の中では、二度も十度も二十度も、その意味がすっかり会得されるまで、この〈雪がやんだ〉という文句が繰り返しつぶやかれた。幾時間も幾時間も雪は降っていたのだ。そして今ややんでしまった。(‥‥)

幾時間も雪が‥‥。昨日の四時から今朝の九時十五分まで」(p.178)。

このように〈雪〉は、ジョゼフが二つのあやまちを犯した日の午後四時から、翌朝の九時十五分まで降っている。そしてここで重要なのは、第二十一章・第二十二章の時点においても、言いかえれば、ジョゼフが肉体の欲望に屈したときにも、モイラを殺した瞬間にも、外では〈雪〉が降っているはずだという点である。事実、第二十二章でも、ジョゼフがモイラの死体を土の中に埋めるとき、〈雪〉がふりしきっており、〈雪〉の描写を読むことができる。

「彼〔ジョゼフ〕の頭の上から、樹々の枝々のあいだから、斑点のような雪が数かぎりなく彼のほうに舞い落ちてきた。彼は思った、〈もしこのまま雪が降りつづくようなら、ぼくは助かる〉と」(p.176)。

上の一節で、「もしこのまま雪が降りつづくようなら、ぼくは助かる」とジョゼフが考えている点は注目に値いする。なぜジョゼフはそう考えるのか。それはことわるまでもなく、降りしきることで積もっていく〈雪〉が、モイラの屍骸を、ということはすなわち、ジョゼフの犯罪を覆い隠してくれるからである。モイラを殺害した日の翌朝、ジョゼフが外の〈雪〉に心をうばわれているのも、ひとつには、〈雪〉が彼の罪跡を掩蔽するからにほかならない[70]。とはいえ、〈雪〉と「ぼくは助かる」(je suis sauvé)ということばとは、このような地上的な次元にとどまらない、深い意味をも有しているように思われる。当然のことながら、《Je suis sauvé.》という表現は、「助かる」だけでなく「救われる」と訳すこともでき、宗教的な救いを問題にする際にも使われる。そして〈雪〉は、その白という色彩が連想させる清らかさから、汚れた欲望と罪とを洗いきよめ、浄化するはたらきをになっているといえるのではないだろうか。この点に関連して、遠藤周作氏は『モイラ』におけるこの箇所に言及しつつ、〈雪〉のもつ秘められた意味をこう論じて

いる。

「このまま雪が降り続くようならば、僕は助かる。それはたんに雪がモイラの死体をかくしてくれるという意味だけではないでしょう。雪はこの場面、神の恩寵をも意味しています。地上のよごれたものを純白にする雪。それは人々の泪、人々の苦しみ、黒い染みをきよめる聖母マリアの祈りを思わせます」[71]。

この文章を読んでただちにわかるように、遠藤周作氏もまた、「助かる」という言い方と雪とを、地上的なレベルだけではなく、宗教的な次元で理解している。しかしながら、〈雪〉を「神の恩寵」とみなすのは、少し早計であり、断定的すぎると思われる。なぜなら降雪そのものは、あくまで単なる自然現象にすぎないからだ。けれども、ジョゼフがモイラの亡骸を埋めるとき、暗闇のなかでうす白い光彩をはなちながら降る〈雪〉は、洗いきよめ、浄化するというその機能を考慮すれば、もしかしてジョゼフが救われるかもしれないという希望の光を投げかけているとみなせるのではないだろうか。また〈雪〉は、第二十三章で降りやんだあとも、あちこちで積もったままのこり、その白く反射する光を最終章におけるまで投げかけている[72]。かくして〈雪〉が放つ希望の光は作品においてさいごまでジョゼフを照らしていると判断することができるのである[73]。

次に、デーヴィドの証言を検討したい。ただ、それに先だって、デーヴィドが作品の中でいかなる位置を占めるのかを明らかにしておく必要があるだろう。作者グリーンは、『モイラ』におけるデーヴィドの登場について、次のように解釈している。

「デーヴィドの割り込みは（‥‥）摂理的である。その割り込みがジョゼフの運命を変容させ、淫蕩のメカニスムを打ち砕いているという意味において」[74]。

ここでグリーンは二つのことを指摘している。一つは、ジョゼフの人生におけるデーヴィドの介入が神の意向にそったものであるという点であり、もうひとつは、ジョゼフが肉なるもののほうに向かい、欲望に身をゆだねることをデーヴィドがはばんでいるという点である。しかしあとの指摘は反論の余地がある。たしかにデーヴィドはジョセフと同じく敬虔なキリスト教信仰をもち、ギリシャ語の勉強を手伝ったり、下宿を変えさせたりすることによって、一見、ジョゼフを神のほうに歩ませているようにみえる。だが以前、論証したように[75]、デーヴィドは世界観、宗教観の差違によって、そして無能なconfesseurであるがために、ジョゼフを肉なるもの、ひいてはモイラのほうに押しやっている。それどころか、『オセ

ロ』が収録された、シェークスピアの本を贈り、また、シャベルの置いてある黒い板小屋に案内することで、ジョゼフを犯罪にも誘導している。したがって、デーヴィドの介入は「淫蕩のメカニズムを打ち砕いている」とはいえないし、ジョゼフが二つの過失を犯すことを、デーヴィドがふせごうとしているともみなせない。逆にデーヴィドはジョゼフの悲劇的な運命の形成に積極的に参与しているのである。

ところが、グリーンは、デーヴィドの介入を神の摂理によるものと理解している。この解釈はたしかに、「淫蕩のメカニスムを打ち砕」くという点を前提としている。しかしデーヴィドがそれでもやはり、信仰に生きるジョゼフの唯一の同伴者であることを考えれば、前提事項を欠いてもこの解釈は相変わらず有効であり、動かしがたいように思われる。とすれば、ジョゼフの運命は神によって予定され、神の意志にもとづくものであるという見方が成り立つ。そしてこのこととともに、「デーヴィドの割り込み」が「摂理的」であるとする見解をおしすすめるならば、デーヴィドは、ジョゼフの救いの問題にかんしての、神の代弁者であるとみなしうるのではないだろうか。同じことであるが、ジョゼフの救いの問題についてのデーヴィドの証言は、神がデーヴィドの口をかりて語ったことばでもあるとうけとれるのである[76]。しかしここまで考えるのは早呑みこみであるかもしれない。というのも、デーヴィドが神の代弁者であるかどうかは実際のところ、明確にはわからないし、デーヴィドの証言は、ただ単に、ジョゼフの救いへの、彼の、あるいは作者グリーンの願い・祈りがこめられたものにすぎないとも了解されるからだ。とはいえ、デーヴィドのことばが、依然として、神のことばになる可能性をはらんでいることだけはたしかである。このことを念頭に入れて、デーヴィドの証言をみていきたい。

ジョゼフの救いにかんするデーヴィドの証言は、第二部第二十五章においてみいだすことができる[77]。すなわち、ジョゼフが警察に自首しに行くために出発する直前、二人がかわした対話の中にみとめられるのであるが、あわせてジョゼフの反応あるいは姿勢にも注意を払いつつ検討することにしよう。二人は、ジョゼフがおちいった今の事態を踏まえて、次のように語りあっている。

「—どうしてこんなことになったんだろう？　と彼〔ジョゼフ〕は訊いた。

デーヴィドは首を横に振った。

—わからないよ、と彼はつぶやいた。でも神さまは時として赦されることがあるんだ‥‥。

—神の話はよそう、とジョゼフは不意にいつもとは違った声で言った。

(‥‥)

—今後ぼくは、と彼〔ジョゼフ〕は靴の紐を結びながら言った、こうしたことすべてを胸におさめて生きていくよ」(p.192)。

この対話のなかで、デーヴィドの、「神さまは時として赦されることがあるんだ」ということばが注意をひく。これは言うまでもなく、二つのあやまちを犯したにもかかわらず、ジョゼフが救われるであろうことを予想した重大な証言である[78]。だがここで、デーヴィドの発言にもまして注目されるのは、ジョゼフが「神の話はよそう」と言って、デーヴィドの話をさえぎり、デーヴィドの意見に少しも耳をかそうとしない点である。ジョゼフは、モイラを相手に肉体の罪におちいる前、自分が神から召され、選ばれた人間なのだという意識をいだいていた。ジョゼフの伝道熱は、強烈な選民意識によってささえられていた。しかしながら、この選民意識は二つの過失をおかすことによって完全に粉砕されたといえよう。ジョゼフはつみびとの意識をいだくがゆえに、デーヴィドの言葉に耳を傾けないのにちがいない。二つの過失の体験を経て、自分が選ばれ、救われるに値いしない人間なのだということを痛感しているからこそ、ジョゼフはデーヴィドの発言を無視するのであろう。とはいえ、ほんとうの意味での救いへの道は、傲慢とも形容できる選民意識ではなく、深刻なつみびと意識をもった時点からはじまるのではないだろうか[79]。そして救いが達成されるためには、つみびととしての自己を全面的に神にゆだね、神のゆるしを真摯に希求する態度が必要なのかもしれない。ジョゼフには、自己を断罪することはあっても、神のゆるしをもとめる姿勢はない。しかしジョゼフが「今後ぼくは、(‥‥) こうしたことすべてを胸におさめて生きていくよ」と言うとき、彼の内心では、選ばれた人ではなく、一人のつみびととして謙虚に生きていく決意が固められているはずである。したがって、この瞬間から、救いに向かっての新たな生のいとなみが開始されたともみなされるのである。

デーヴィドとジョゼフの会話の続きを引用することにしよう。

「—デーヴィド、君とぼくは同じことを信じている。キリストは人を裁くのを禁じられたことを[80]、君はおぼえているかい？

—ぼくは君を裁かないよ、一度も君を裁いたことはないよ、とデーヴィドは熱烈さと一種の性急さをこめて答えた。ぼくはいつでも、君がぼくよりも値打ちがある人間だと信じてきた。今でもそう信じているよ」(p.192)。

さいごの、「ぼくはいつでも、君がぼくよりも値打ちがある人間だと信じてきた。今でもそう信じているよ」という言葉もまた、看過できない重要な証言である。このことばからわかるように、デーヴィドはジョゼフとジョゼフの生き方とを、終始一貫して評価している。その理由は、ジョゼフが純粋さをもとめて、デーヴィド以上に、そして誰より以上に、罪（肉なるもの）とたたかってきたという点に存する。デーヴィドにとって、ジョゼフがたたかいに負けたことは問題ではない。たとえ敗北することになるとしても、罪（肉）との争闘を徹底的に生きる者は評価すべき人間、救われるに値いする人間だと、デーヴィドは考えているのだ。この見方は作者グリーンが共有しうるものである。グリーンは『日記』のなかで、「おそらく（‥‥）重要なことは、勝つことではなくて死ぬまでたたかうことなのだ」[81]と書き、あるいはまた、「大事なのは、たとえそのたびごとに敗れるとしても、たたかうことなのだ。受け入れ、同意することは、おぞましいことだ」[82]と述べている。ここでのたたかいが、肉なるものあるいは欲望との闘争を意味することは言をまたない。かくしてグリーンもまた、勝敗を度外視したたたかいの重要性を見きわめているのである。さらにグリーンは、「思うに必要なことは、少なくとも葛藤があるということである。たたかいを拒むとき、心の静けさのようなものが得られる。しかしそのときは、神は去ってしまうのである」[83]と語り、肉体と魂、欲望と信仰との相剋の大切さを確認するとともに、たたかう姿勢を放棄して、心の平安を得ることが、神をみうしなうことにつながると判断している。逆に言えば、肉なるものとの争いによってもたらされる苦悩と内的な混乱の中にしか救いはありえないのだと、グリーンはみなしているのである。デーヴィドの証言は、作者グリーンのこうした見解を色濃く反映しているといえよう。

さて、デーヴィドはさいごに、「ぼくはちっぽけな牧師にしかならないだろう。でも君はといえば‥‥」(p.192)と述べ、中断したことばを言いつなぐかわりに、ジョゼフの胸に手を置き、ジョゼフの出発を見送っている。胸に手を置くという仕草についてはのちに取りあげるので、ここではデーヴィドの中途半端な言葉だけを問題にしたい。いったい、デーヴィドは、「でも君はといえば」(Mais toi)のあとに何を言いたかったのであろうか。遠藤周作氏は、グリーンの『日記』の中の、「二つの形でしか人間の志向がないという事が私にはよくわかった。それは神に没入する人間になるか、淫乱者になるかである。なぜなら両者とも極限にまで走り、ともにそれぞれの形で絶対的なものを志向するからである」[84]という文章を援用しつつ、次のように解釈している。

「『しかし君は‥‥聖者になれる人だ』とデーヴィドは言いたかったのです。(‥‥)たしかに聖者になれる人はひょっとするとすさまじい淫乱な人間になる人なのかもしれません」[85]。

このように遠藤周作氏は、「しかし君は」(Mais toi)のあとにくる言葉を「聖者になれる人だ」とみなしている。しかしながら、私たちは「聖者」それ自体だと理解したい。Mais toiのあとにはtu es un saint. ということばが続くと考えたいのである[86]。なぜなら、聖者こそ、肉なるものまたは欲望と、誰よりもはげしくたたかうがゆえに、もっとも淫乱な人間でありうるかもしれないからだ。そして『モイラ』のジョゼフの場合がまさしくそうであるように、人は宗教的高揚の頂点にあるとき、もっともはげしい肉の誘惑に遭遇する危険にさらされるのであろう。たしかに、一方では、聖者あるいは「神に没入する人間」(le mystique)と「淫乱者」(le débauché)とは絶対を志向するという点で類縁性をもつという議論は正当である。しかし他方では、グリーンが『日記』の中で、「聖者がつみびとの心のなかで、つみびとが聖者の心のなかで動きまわっている。これが人間の条件だ」[87]と書き、また、「われわれの各々の内心には、つみびとと聖者とが棲んでいるのだ」[88]と言っているように、人間が同時に「聖者」への志向と「つみびと」への志向とをはらんでいることもまた真実なのだ。ここでの「つみびと」とは淫乱者の同義語であると考えて差しつかえない。とすれば、聖者とは淫乱者のことであり、逆に、淫乱者こそ聖者でありうるのである。要するに、聖者か淫乱者か、ではなく、聖者でありかつ淫乱者であるということなのである。聖なるものとは汚れたものと隣接しているというより、汚れたものの中にこそみいだされるものなのかもしれない[89]。それゆえ、デーヴィドの言いたかった言葉を、「聖者になれる人だ」とみなすのではなく、「聖者だ」と考えるほうがいっそう適切なのである。

こんどは、作品のなかに挿入された聖書の一節に目を向けてみたい。第二部第十七章において、デーヴィドは、ジョゼフが『ロメオとジュリエット』の本をやぶいたことをキリグルーから聞き知って、削除版のシェークスピアの書物を友情の記念としてジョゼフに贈ることにする[90]。その際、デーヴィドは見返しの頁に、二人の名と、一九二〇年十一月二十五日の日付[91]とともに、何か聖書の文句を書きこみたいと思う。しかし適当な文句が思いうかばないのでジョゼフに相談する。するとジョゼフは霊感に打たれたかのように、不意に次の文句を叫ぶのである。

「たとえあなたの心があなたを責めるとしても、神はあなたのこころよりも大いなり(Si votre cœur vous condamne, Dieu est plus grand que votre cœur.)」

(p.147)。

これは、「ヨハネの第一の手紙」第三章第二十節の文句である[92]。ジョゼフがこの文句を口にするのは、自己の欲望に有罪感をいだき、それだけになおさら、救いを、また神の愛を切実に希求しているからにほかならない。げんに、ジョゼフはこのあと、「この言葉はぼくに答えてくれているんだ」(p.147)と説明し、デーヴィドに自らの肉体的苦悩とモイラのことを告白している。そして第二部第十七章は、デーヴィドが本の見返しの頁に書きこんだ聖書の一節を、ジョゼフが自分に言い聞かせるように朗読するところでおわっている[93]。

上に引用した「ヨハネの第一の手紙」の中の一節は、第二部第十八章でさらにもう一度出てくる。ジョゼフはデーヴィドと別れたあと、自室で早速、デーヴィドがくれたシェークスピアの本をひもとき、さいごに、デーヴィドが聖書の文句をしるした頁に立ちかえるのである。

> 「頁を逆方向にめくると、彼〔ジョゼフ〕は、デーヴィドの書いたいくらかの言葉が記入されている最初の頁にたどり着いた。そして彼は、目がぼんやりとするまで、その言葉をみつめた。文字は目の前でゆらめいていた。〈たとえあなたの心があなたを責めるとしても、神はあなたの心よりも大いなり〉。彼はそっと本を顔に近づけ、愛された弟子〔ヨハネ〕の言葉の上に唇をあてた」(p.151)。

ジョゼフは聖書の一節を、「目がぼんやりとする」まで、また、「文字」が「ゆらめ」くまで凝視している。ではなぜ「目がぼんやりと」し、「文字」が「ゆらめ」くのだろうか。それは、目の疲労によるものではもうとうない。おそらく、この一節を読んでジョゼフが深く感動し、目に涙があふれたからであろう。したがって、ジョゼフが救いを、あるいは神の愛をもとめる気持ちはこの時点においてもきわめて強く、痛切なのである。

このように、『モイラ』において、「ヨハネの第一の手紙」からの引用は、合わせて三度なされている。そしてさらには、第二部第二十五章における、ジョゼフと別れる間際のデーヴィドの仕草も、この聖書の言葉との関連で理解することができるのではないだろうか。すでに指摘したように、デーヴィドはさいごに、「ぼくはちっぽけな牧師にしかならないだろう。でも君はといえば‥‥」(p.192)と言い、「君はといえば」のあとに続く言葉を付け加えるかわりに、ジョゼフの胸に手を置くという仕草をしていた。この仕草をすることによってデーヴィドは、「たとえあなたの心があなたを責めるとしても、神はあなたの心よりも大いなり」という言葉をジョゼフに思い出させたかったのではないだろうか。こう考えると、こ

の聖書の一節は、第二部第十七章以降の作品において、ライトモチーフを形成しているとさえみることができるのである。

ところで、この聖書の文句が意味するものは、たとえひとりの人間がなんらかのせいで自分を責め、苦しみにさいなまれることがあるとしても、神は人間の心よりもはるかに大きな器の持ち主であるから、その苦しむ人に深い愛とあわれみとをそそいでくださるのだ、ということであろう。あるいは逆に考えて、苦しむ人間こそ神の愛とめぐみを受けるにふさわしく、救われる値打ちがあるのだということを、このことばは語っているかもしれない。この点、この聖書の一節は、グリーンが若い頃に書いた『フランス・カトリック信者たちに与えるパンフレット』(1924)の中の次の考え、すなわち、「神につかえること、それは苦しむことだ」[94]という見方につうじている。そしてこの一節は『モイラ』においては、モイラへの情熱・欲望にとらえられたことで、さらには、肉体のあやまちを犯したことでジョゼフがいだく苦悩にたいする聖なる返答としてこだましているように思われる。それゆえ、この聖書の言葉は、作品のなかでことのほか大きな重みをもって横たわり、〈雪〉のイマージュ、デーヴィドの証言と同様に、否、それ以上に、ジョゼフの救いにかんして希望の光を投げかけているのである。

ジョゼフの救いの問題に関連して、〈雪〉のイマージュ、デーヴィドの証言、「ヨハネ第一の手紙」第三章第二十節の言葉を検討してきた。ここで、以上のことを踏まえて、作品最終章の、ジョゼフがファーガスン夫人の家をあとにするところを再度瞥見しておきたい。ジョゼフは、自分がつみびとであることを認め、警察に自首することを決意するのであるが、三つの角度からの分析によって浮かびあがってきた、ジョゼフの救いの可能性、ジョゼフの生に投げかける希望の光を視野に入れるならば、ジョセフが警察に向かうとき、ジョゼフは自分の意図を越えて、同時に神のほうにおもむいているといえるのではないだろうか。そしてジョゼフは、この世の裁きに身をゆだねるためとともに、この世の次元を超越したいと高き者、神の法廷に出向くために、神の大いなる愛によってさばかれるために、家を出発するのではないだろうか。とすれば、「通りの端から、ひとりの男が彼に向かって歩いてきた」(II-25、p.193)という、作品のさいごの文における「ひとりの男」とは、ジョゼフを逮捕するために近づく刑事であるばかりではなく、ジョゼフを迎えにやってくる神の使者だと解することもできるように思われるのである。

(8)《violence》と信仰との関連

私たちは、ジョゼフの《violence》に焦点をあわせて作品を分析したあと、犯罪後のジョゼフの行動をたどり、それから、ジョゼフの救いの問題について考察してきた。ジョゼフが救われる可能性の中にあることを前提にしたうえで、さいごにもう一度、ジョゼフの《violence》に論点をもどし、《violence》の意味を再確認するとともに、《violence》と信仰との関連についてまとめておきたい。

ジョゼフの《violence》は、すでに見たように、プレローとの出会いもしくはプレローの挑戦がきっかけとなってめざめ、顕在化する。しかしジョゼフの《violence》の根底には、彼の純粋志向・ピュリタニスム的態度が横たわっている。換言すれば、ジョゼフの《violence》は、純粋志向・ピュリタニスム的態度から生じたものなのである。純粋志向・ピュリタニスム的態度は、当然のことながら、肉なるものへの強烈な反撥をひき起こす。この反撥のすさまじさは、欲望（肉なるもの）とのたたかいのはげしさとなって結晶するし、さらには、欲望の対象を消滅させたいという願いのはげしさをももたらす。これがまさしく《violence》であり、私たちはこの《violence》の意味を、マック・アリスターへの暴力、プレローとの決闘、モイラ殺害の場面の再度の分析をとおして明らかにした。

しかしながら、肉なるものへの反撥ないし純粋志向・ピュリタニスム的態度は、すでに触れたように[95]、肉なるものを罪悪視し、ことさら肉なるものを忌避・排斥するがゆえに、肉なるものは忌避・排斥の対象としてかえってジョゼフの意識のなかで浮き彫りにされる結果となる。第二部第十二章における、デーヴィドとジョゼフの会話は、このかんの事情をうまく語っている。ジョゼフがデーヴィドの結婚に、「危険な誘惑」(p.130)であるとして反対したとき、デーヴィドはジョゼフのことを心配する立場から、こう話している。

> 「ジョゼフ、ぼくがこれから言うことを許してくれたまえ、でも君は‥‥姦淫のことを、君が姦淫と呼ぶもののことをあまりにも考えすぎているのだ。君がその姦淫を避けていることはわかっている。しかし君はそのことを考えているのだ」(p.131)。

これにたいしてジョゼフは、「ぼくは、人が大嫌いなものを考えるように、そのことを考えているだけだよ」と反駁する。しかし、「どんなことがあっても、そんなことはけっして考えるべきじゃないよ」と言いはるデーヴィドに、「ぼくはそのことを考えないではいられないんだ」とジョゼフは答える(p.131)。このようにジョゼフは「姦淫」を「避け」ながらも、「姦淫」のことを「考えないではいられない」ことを認めている。ジョゼフは肉なるものを避けつつも、これを意識しないでは

いられないことになるのだ。けれども、肉なるものを意識しないではいられないということは、結局のところ、肉なるものに呪縛され、従属し、支配されることにほかならない。ここから、情熱・欲望のはげしさとしての《violence》が生じる。ことにモイラのベッドに身を投げるという行為、モイラとの肉体の交わりは、この《violence》を鮮明に際立たせている。

こうしてジョゼフの《violence》は、すでにも述べたように、欲望のはげしさ、欲望とのたたかいのはげしさ、欲望の対象を殺害したいという欲求のはげしさ、という三重の意味をあわせもつ。しかもこの《violence》は、プレローとの決闘の際の暴力、モイラ殺害行為がそうであるように、この三重の意味を同時にふくみながら外在化するのだ。したがって、このような《violence》をうちにかかえることで、ジョゼフがその生の悲劇的な結末を内側から必然的に、不可避的に、要するに宿命的なかたちでまねいていることはたしかなのである。

さいごに、《violence》と信仰、欲望と宗教とのあいだの関係について整理しておきたい。そこでまず、ジョゼフの内的なドラマを、肉体と魂、あるいは欲望と宗教との単純な対立・葛藤の図式のなかで理解することはまちがっているという点を再度確認しておこう。肉体的高揚と宗教的高揚との間の揺れうごきを示す箇所を検討したとき明らかになったように、欲望と信仰とが相剋の中で重なりあう場合がみられるし[96]、さらには、『ロメオとジュリエット』の本をひき裂くという行為がそうであるように、宗教的高揚（信仰）と肉体的高揚（欲望）とが純粋に混じりあうこともあるのだ[97]。《violence》の発現である、マック・アリスターへの暴力行為も同様である。ジョゼフにおいて、信仰は欲望から安易に切り離すことはできない。そうではなく、ジョゼフの肉体的欲望、《violence》こそが、彼の宗教をささえているとみるべきなのだ。なぜなら《violence》とは欲望のはげしさとともに、欲望とたたかうはげしさをも意味するのだから。第二部第二十章において、ジョゼフがデーヴィドに語る次の言葉をふりかえることにしよう。

> 「君は主を平安のうちに愛している。だがぼくにあるのは神の怒り〔神へのはげしい欲求〕なのだ。ぼくははげしさでもって (avec violence) しか愛することができない。なぜなら、ぼくは欲望の人間だから」(p.160)。

私たちはこの文章を引用したとき、情熱・欲望のviolenceと敵対するものとして、信仰のviolenceを仮りに設定した[98]。なるほどここではジョゼフの熱狂的な信仰が語られている。しかし、「ぼくははげしさでもってしか愛することができない。なぜなら、ぼくは欲望の人間だから」という言い方から読みとるべきことは、欲望

のはげしさの反動のエネルギーとして生じた霊的なはげしさがジョゼフの宗教を形成しているということではなく、欲望のはげしさとしての《violence》、もしくは欲望をいだくことでの肉体的苦悩それじたいが、ジョゼフの激越な信仰をもたらしているという点ではないだろうか。「はげしさでもってしか愛することができない」と彼が言うときの「はげしさ」とは、欲望とは別箇のエネルギーではなく、まさしく欲望のはげしさをふくむ《violence》そのもののことであると考えられるのである。また、肉欲の苦しみがそのままジョゼフの宗教をささえていることについては、第二部第十七章における、ジョゼフとデーヴィドの会話が示唆に富んでいる。モイラへの欲望に責めさいなまれるジョゼフは、イエス・キリストのことを話題にし、二人のやりとりは以下のように続けられている。

「—キリストは荒野にあって試みにあわれた。なぜなら飢えをおぼえられたからだ。キリストの受けた誘惑は飢えだった、肉体の飢えだ‥‥[99]。

—そうだよ、とデーヴィドは質問を予感して言った。

—ではデーヴィド、もうひとつの飢えは‥‥。キリストがその飢えを知られたかどうか、君にわかるかい？

デーヴィドの目は、突然の恐怖におそわれたためであるかのように大きくなった。

—わからないよ、と彼はささやいた。ぼくは一度もそんなことを考えたことがない。そんなことは考えないほうがよいよ、ジョゼフ。ほとんど冒瀆に近いよ。

—ぼくは冒瀆することを望んでいるわけじゃない、とジョゼフはごく低い声で言った。でも、あの人もまたそんなふうに苦しまれたのだと、誰かがぼくに教えてくれたら、ぼくは自分をもっと強く感じられるだろうし、〈あの人もまた‥‥〉と自分に言い聞かせられるような気がするんだ」(p.144-5)。

ジョゼフはこの対話のなかで「もうひとつの飢え」のことを語っている。この「飢え」が肉欲にまつわることがらを指し示すことは言をまたない。ジョゼフは、イエス・キリストもまた、自分と同じようにこの「肉体の飢え」(faim du corps)に苦しむことがあったのなら、「あの人もまた‥‥」と思うことで、「自分をもっと強く感じられるだろう」、言いかえれば、よりたやすく生きられるだろうし、救われるだろうと考えている。そしてここでは、「肉体の飢え」つまり肉欲の苦悩は、それじたいでジョゼフを神のほうに向かわせているとうけとれる。「肉体の飢え」がそのまま神への渇望、絶対へのはげしいあこがれにつうじ、結びついていると推察することができるのである[100]。ジョゼフの《violence》あるいは欲望は、苦しみをともなうとしても、彼を肉なるものに向かわせると同時に、神のほうにも

押しやる強烈なエネルギーになっているといえるのではないだろうか。グリーンは『日記』の中で「人は肉体によって魂に達する」[101]と書いている。この命題はまさしくジョゼフの場合にあてはまる。またグリーンは同じく『日記』のなかで、次のように述べている。

「肉の狂乱の中には、失われた楽園への盲目的な欲求にも似た何かがひそんでいる。(‥‥) 快楽の熱狂は、(‥‥) それに神的なもの、神的なものへの郷愁がまじりあっていることを認めなければ、断じて理解することはできない」[102]。

この文章において、「肉の狂乱」そして「快楽の熱狂」という表現のかわりに、《violence》もしくは欲望という語を置いて読みかえることは可能であろう。ここから《violence》あるいは肉欲は「失われた楽園」へのすさまじい欲求と「神的なものへの郷愁」とをうちにふくんでいることになるのだ。結局のところ、ジョゼフの宗教、ないし熱狂的な信仰(fanatisme)は、彼の《violence》そしてまた肉体的欲望を基盤として成り立っていると断定することができるのである。

4．おわりに

以上のように、私たちは本論第一章において、小説『モイラ』のジョゼフの内面における神への志向をしらべ、第二章では、肉なるものへの志向を検討した。そして第三章では、《violence》と信仰との関連を考究するために、《violence》の分析を中心にしつつ、また、作品における〈火〉のイマージュや、宗教的高揚と肉体的高揚とのあいだの揺れうごき、および両者の混淆を示す箇所をひき合いに出しながら、作品を読解してきた。あわせて犯罪ののちのジョゼフの行動やジョゼフの救いの問題にも言及した。ここで明らかなことは、ジョゼフの《violence》が一方では、ジョゼフを肉なるもの（罪）のほうにみちびき、彼を殺人者に変貌させてしまう必然性・宿命性をもつとしても、他方では、ジョゼフを神のほうに向かわせるエネルギーとなり、彼の熱狂的 (fanatique) な信仰の基盤となっているという点である。

ここで『モイラ』にあらわれた〈火〉（または〈光〉）のイマージュをあらためて見なおすことにしよう。すでに述べたように、〈火〉にまつわる語ないしイマージュは、情熱・欲望に責めさいなまれる内面のありさまとともに、はげしく神を追いもとめる内面のありさまを表出していた。同じことであるが、〈火〉は肉なるものを志向する心的状態とともに、神を志向する心的状態を表徴するものとして

用いられていた。このようにこの作品では、〈火〉は二つの心的状態を指し示すイマージュとして出てきている。しかしながら、〈火〉はどちらの心的状態を言いあらわす場合でも、ジョゼフの《violence》を象徴しているといえよう。なぜなら《violence》はジョゼフを肉なるものに向かわせるとしても、同時に神への志向をささえる基盤にもなっているのだから。《violence》の有するこの両義性が、〈火〉のイマージュの両義性につながっているのである。

このことをもう少し説明しよう。第二部第二十章で、モイラへの情熱に支配されたジョゼフは、「ぼくは、火が何であるかを知っている。火はぼくの祖国だ」(p.160)とデーヴィドに告白し、そして「神は火である」(p.160)と言いつつも、「その〔神の〕非存在の恐怖もまた、火によって、黒い火によって表される」(p.160)と述べていた。それからジョゼフは自己のうちにやどる信仰、神への志向を、〈火〉を連想させる〈燃える〉(brûler)という語をもちいて、「ぼくらは燃え上がるだろう(nous brûlerons)、永遠のよろこびの中で燃え上がるだろう(brûlerons)」(p.161)と表現していた。このあと、ジョゼフはデーヴィドにこう話している。

「ぼくたちが天国からひき離されているのは、ただ炎の厚みによってだけなんだ」(p.161)。

ここでもジョゼフは〈火〉のイマージュを利用して、自己の内面のありさまを浮き彫りにしている。きわめて難解であるが、この言葉からまず読みとるべきことは、熱狂的な信仰をもち、救われることのよろこびを打ち明けたあとに語られたものであるのだから、ジョゼフがかぎりなく神のほうに近づいているという点、あるいは近づこうとしているという点であろう。神への無限接近をもたらすもの、それはもちろん「炎の厚み」(l'épaisseur d'une flamme)である。ではこの「炎の厚み」とは何なのか。言うまでもなくそれは、ジョゼフの宗教をささえる《violence》を暗示している。けれども上の言葉は同時に別のことを意味している。それは、「炎の厚み」が、《violence》が、神からジョゼフをひき離す危険性をもはらんでいるという点である。というのも《violence》は肉なるもの(罪)にみちびくものでもあるから。かくしてジョゼフの《violence》に照応する〈火〉は、神の火ともなりうるし、地獄の火にもなりうる。『モイラ』における〈火〉のイマージュを問題にしつつ、ジャック・プチは次のように述べている。

「火は神的にもなりうるし、地獄的なものにもなりうる。同じviolenceが欲望にも、あるいは、魂の愛の中にもあらわれ出るのだ。ジョゼフが生きる宗教的な高揚は、デーヴィドのおだやかな信仰よりも、焼き尽くすような人間的な愛に近いようにみえる」[103]。

ジャック・プチのこの見解は、私たちのこれまでの議論と抵触しない。それどころか、〈火〉や《violence》について私たちが論じてきたことの正当性を強めている。はじめの文では、ジャック・プチは〈火〉のイマージュの両義性を適切に指摘しているし、二番目の文においては、「同じviolenceが」という言い方からわかるように、二つのviolenceではなく、ただ一つのviolenceしか認めず、しかもそのviolenceの有する二つの方向性を私たちと同様に見さだめている。さいごの文でジャック・プチが言いたいのは、ジョゼフの宗教的高揚の中には肉体的高揚が入りまじっているということであろう。私たちはこの点にも言及した。ただ、「ジョゼフが生きる宗教的高揚」が「人間的な愛に近い」というジャック・プチの論定はもう少し発展させて考える必要があるように思われる。この点にかんして、グリーンは『日記』の中でこう語っている。

「かつて一度も顔を見たことがなく、声も聞いたことがない誰かを死ぬほどまでに愛すること、これがキリスト教のすべてなのだ」[104]。

グリーンはここで信仰を、「誰かを死ぬほどまでに愛すること」と定義している。この定義はジョゼフの信仰にもそのままあてはまるだろう。苦しみ悶えつつ神をひたすら愛し、追いもとめるジョゼフの信仰は、恋愛的状況において見出されるような人間的な情熱から成り立っているのかもしれない。ジョゼフの宗教が欲望もしくは《violence》によってささえられていることはすでに述べた。ジョゼフは《violence》を生きぬくことによって、自己の全体的な上昇・救いを希求しているのではないだろうか。換言すれば、ジョゼフは、魂によってのみならず肉体によっても、ないしは肉体とともに神を愛しているがゆえに、自己の肉体をもふくめた上昇・救いを切実に願っているとみなされるのである。ジョゼフが《violence》をかかえることで、肉体のあやまちをおかし、犯罪者になることは彼に課せられた宿命であるとしても、ジョゼフにとって、宗教は情熱・欲望あるいは《violence》を抜きにしてはありえなかったのであろう。私たちは、ジョゼフが救いへの道を歩んでいる可能性を有していることを指摘した。もっとも、人が救われるかどうかは、神のみが知る問題である。しかし、もしジョゼフが救われるとすれば、ジョゼフの救いは身をもって《violence》を生きることによってしかありえなかったのである。

ここまで、私たちは小説『モイラ』における宿命の世界の構造・成り立ちを解明するため、ジョゼフの生の歩みに焦点をあわせて作品を読解してきた。すなわ

ち、まず先に、ジョゼフを取りまく人物たち、ならびに、ジョゼフの周囲に存在する様々な事物がジョゼフにたいしてはたす役割を考察し、宿命性の表現を〈外側〉から検討した。それからこの小論においては、ジョゼフの《violence》の分析を中心にすえることによって、宿命性のあらわれをジョゼフの〈内側〉からとらえることをこころみた。しかしながら、この小説では、主人公ジョゼフに収斂するかたちで物語が展開するものの、ジョゼフの生の歩みに並行し、あるいは交錯しながら、他の人物たちの秘められたドラマが見え隠れに書きこまれている。サイモン、モイラ、プレローのドラマがそれである。そしてこれらの副人物たちのドラマが主人公ジョゼフの〈宿命〉の物語に照応し、重なりあうところに、『モイラ』の特徴がもとめられるのである。また、このことによって、作品に深さと広がりが与えられているようにみうけられる。したがって、ジョゼフの視点に立つのではなく、これらの副人物たちの立場にたって作品を読みなおすこともまた、可能だし、是非とも必要な作業なのである。『モイラ』の秘められた物語を明るみに出すこと、これを次の課題としたい。

註

67) 目次の0．1．および2．の中の(1)と(2)に該当する部分は、『『モイラ』再読のこころみ(1)—ジョゼフの《violence》の分析を中心に—』、山口大学「文学会志」第40巻、1989、pp.159-176を、2.の(3)(4)と3. の(1)から(4)までのところは、『『モイラ』再読のこころみ(2)—ジョゼフの《violence》の分析を中心に—』、山口大学「独仏文学」第12号、1990、pp.33-56を、3.の(5)と(6)は、『『モイラ』再読のこころみ(3)—ジョゼフの《violence》の分析を中心に—』、山口大学「文学会志」第41巻、1990、pp.73-90を参照。

68) もっとも、『モイラ』において、神の存在が感知されているところもみいだせる。第一部第十八章で、ジョゼフとデーヴィドは暗闇のなかで神に祈る。するとジョゼフは「かつて経験したことのない幸福」にひたされ、「心地よい安堵感」をあじわう(p.89)。このときの体験をかえりみて、のちにジョゼフはデーヴィドにこう語っている：「ぼくらがいっしょにお祈りをあげた晩のことをおぼえているかい？(‥‥)あの晩、神がぼくらのそばにいるような気がしたよ」(II-20, p.158)。

69) *Le Revenant*, *Journal V*, 24 mars 1950, IV, p.1142.

70) ジョゼフが〈雪〉に心をうばわれるもうひとつの理由として、彼が放心状態にあることが挙げられる。

71) 遠藤周作：『キリスト教は肉欲を否定するか—「モイラ」をめぐって—』、主婦の友社版『モイラ』への〈解説〉、「キリスト教文学の世界1　J・グリーン　ジッド」所収、1977、p.18。

72) 最終章（第二部第二十五章）の冒頭には、「ジョゼフのまわりじゅうで、太陽の光線がきらきらする雪の白さに吸い込まれ、雪の白さは太陽の光線を空に向って送り返しているようにみえた」(p.189) という描写がみられる。また、最終章の末尾、ジョゼフが自首しに行くところでは、「光が樹々の背後でたゆたい、その枝の一本一本は、灰色に変わりつつある薄青い空の色を背景に、白くくっきりと浮かびあがっていた」(p.193) という一文を読むことができる。ここでの樹々の枝の白さが、積雪によるものであることは言うまでもない。

73) ジャック・プチは、『モイラ』の終わりの部分をもんだいにして、「たとえどんなにわずかであれ、希望の光が結末で輝いている。そしてその希望の光を、依然として明るい黄昏が象徴しているのだ」と述べている（Jacques Petit：*Julien Green*, 《*l'homme qui venait d'ailleurs*》, Desclée de Brouwer, 1969, p.238)。しかしながら、希望の光は黄昏の光ではなく、〈雪〉の光によって暗示されているとみるのが適切であると思われる。

74) *Le Revenant*, 24 mars 1950, p.1142.

75) デーヴィドがジョゼフにたいしてはたす役割についての詳細な議論は、拙稿『ジョゼフを取りまく人物たち（1）—ジュリアン・グリーンの『モイラ』について—』、山口大学「文学会志」第39巻、1988, pp.64-68を参照。

76) 遠藤周作氏もまた、デーヴィドの融和的な信仰に言及しつつ、次のように述べている：「神はそのデーヴィドを通して部分的にジョゼフに語られていることも事実です」(強調は遠藤氏。前掲評論『キリスト教は肉欲を否定するか—「モイラ」をめぐって—』、主婦の友社版『モイラ』への〈解説〉、p.15)。

77) デーヴィドは第一部第十八章でジョゼフに、「君は信じている。君は救われているんだ」(p.88) と語っている。また第二部第二十章で、「神が君を選ばれたことを、ぼくはずっと確信してきたよ」(p.158) と言いはなっている。しかしこれらの言葉は、ジョゼフが二つのあやまちを犯す以前に言われたものなので、問題にならない。

78) あやまち・罪（faute）が赦しあるいは恩寵につながるという考え方は、グリーンしじんのものでもある。グリーンは『日記』のなかで、「神は時として、私たちが若干の罪(fautes)を犯すのを赦されることがある。それほど神は私たちを赦すことによろこびをいだかれるのだ」(*Le Revenant*, 10 novembre 1947, p.987) と書いている。また彼は、「犯されたあやまちは恩寵に変わることがありうる」(*Le Bel Aujourd'hui*, *Journal* Ⅶ, 14 juin 1956, V, p.32) とも述べている。

79) この点にかんして、アンドレ・ブランシェは『モイラ』について論じた文章のなかで、次のように考察している：「神に仕えていると信じる人は自分しか求めていない（‥‥）、おそらく自分を大罪人とみなす者が神の友なのであろう」(André Blanchet：《*Moïra* ou le nouveau roman chrétien》, in *La Littérature et le spirituel II*, 《*La Nuit de feu*》, Aubier, 1960, p.142)。

80) 「マタイによる福音書」第七章第一節には、イエスが語った次の言葉が書きしるされている：「人をさばくな。自分がさばかれないためである」。ジョゼフはこの箇所をふまえたのだと思

われる。また、「ローマ人への手紙」第二章第一節では、次の記述をみいだすことができる：「(‥‥)すべて人をさばく者よ。あなたには弁解の余地がない。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めている」。

81) *Devant la porte sombre*, *Journal III*, 24 juillet 1940, IV, p.520.

82) *Le Revenant*, 24 janvier 1946, p.898.

83) *Vers l'invisible*, *Journal VIII*, 10 octobre 1961, V, p.282.

84) *Devant la porte sombre*, 30 décembre 1940, p.549. なお、訳文は遠藤氏によるものである。

85) 遠藤周作：前掲評論『キリスト教は肉欲を否定するか—「モイラ」をめぐって—』、主婦の友社版『モイラ』への〈解説〉、p.15。

86) このことに関連して、アンドレ・ブランシェは、「罪人が挫折した聖者であることも、時にはそれでも聖者であることさえ、起こりうるのである」(強調はブランシェ。前掲論文《*Moïra* ou le nouveau roman chrétien》, p.134)と述べている。この見解は私たちの議論の正当性を保証している。

87) *Vers l'invisible*, 4 février 1965, p.361.

88) *Le Miroir intérieur*, *Journal VI*, 26 juin 1951, IV, p.1225.

89) ちなみに、ロジェ・カイヨワは、「聖なる」(saint, sacré)に相当する、ギリシャ語の*ἅγιος*が古代では同時に、「汚れた・汚された」(souillé)という意味をもっていたことを指摘している(cf. Roger Caillois：*L'homme et le sacré*, coll. Idées, Gallimard, 1950, p.40)。

90) デーヴィドは、「シェークスピアを読んだことのない人間は、教養のない人間だ」と断定し、そして「人間のこころがどんなものか知るために」は、シェークスピアを読むことが必要だと言って、ジョゼフに本を贈るのである (p.146)。

91) ここで、作品の時代背景が正確に示されたことになる。

92) ただし、聖書協会 (Les sociétés bibliques)版の聖書では、この箇所は、(‥‥) si *notre* cœur *nous* condamne, Dieu est plus grand que *notre* cœur(‥‥)である。つまり「あなたの心があなたを責める」ではなく、「われらの心がわれらを責める」となっている。La Bible de Jérusalem (CERF,1973)でも、votreがnotreに、vousがnousになっている。この人称の相違はおそらくジョゼフあるいは作者グリーンの思いちがいによるものであろう。しかし人称が二人称であることで、ジョゼフの有罪感と救いへの希求はいっそう浮き彫りにされ、ジョゼフが見えざる神と対峙する度合いはそれだけ深まっているように思われる。

93) この部分では、問題の一節は、「たとえわれらの心がわれらを責めるとしても(Si *notre* cœur *nous* condamne‥‥)」(p.149)となっている。つまり「あなた」が「われら」に変わっている。けれども、第二部第十八章の、ジョゼフがこの一節を黙読するところでは、151頁からの次の引用文を読めばわかるように、「われら」は「あなた」にもどっている。

94) *Pamphlet contre les catholiques de France*, I, p.892.

95) 拙稿『『モイラ』再読のこころみ (1) —ジョゼフの《violence》の分析を中心に—』の2.

の(2)、p.172を参照。

96) 拙稿『モイラ』再読のこころみ(2)—ジョゼフの《violence》の分析を中心に—』の3.の(3), pp.45-51を参照。

97) 上記の拙稿、3.の(4), pp.51-54を参照。

98) 上記の拙稿、3.の(2),p.44を参照。

99) 「マタイによる福音書」の第四章第一節から第十一節にかけて、イエスが荒野で四十日間、悪魔から試みをうけたことが語られているが、ここでの「飢え」は、もちろん、断食による空腹を指し示している。

100) 原田武氏は、グリーンにおける「肉体の飢え」をもんだいにし、こう説明している：「かれ〔グリーン〕にあっては、faim charnelle なるものは、一面、神へのあこがれであるとも解せられるのである」(『ジュリアン・グリーンにおけるsensualitéについて』、大阪外国語大学フランス研究会発行*études françaises*, 第8号、1968,p.34)。

101) *Le Revenant*, 22 juillet 1948, p.1025.

102) Ibid., 2 janvier 1949, p.1058.

103) Jacques Petit：前掲書*Julien Green*, 《*l'homme qui venait d'ailleurs*》,p.238.

104) *Devant la porte sombre*, 30 janvier 1941, p.556.

参 考 文 献

グリーンにかんする研究書・論考は数多くあるが、この小論の作成に際して、主として下記の文献を参照した（◎印は研究書、○印は小品の論考ないし評論)。

◎ Antoine Fongaro：*L'Existence dans les romans de Julien Green*, Signorelli, Rome, 1954.

◎ Jean Sémolué：*Julien Green ou l'obsession du mal*, Editions du Centurion, 1964.

◎ Jean-Claude Joye：*Julien Green et le monde de la fatalité*, Arnaud Druck, Berne, 1964.

◎ Oswald Muff：*La dialectique du néant et du désir dans l'œuvre de Julien Green*, Keller, Zurich, 1967.

◎ Jacques Petit ： *Julien Green* ,《*l'homme qui venait d'ailleurs*》, Desclée de Brouwer, 1969.

◎ Jacques Petit：*Julien Green*, coll. "Les écrivains devant Dieu", Desclée de Brouwer, 1972.

◎ Jean-Pierre J. Piriou：*Sexualité, religion .et art chez Julien Green*, Nizet, 1976.

○ André Blanchet：《Moïra ou le nouveau roman chrétien》, in *La Littérature et le spirituel II*, 《*La Nuit de feu*》, Aubier, 1960.

○　原田武：『ジュリアン・グリーンのsensualitéについて』、大阪外国語大学フランス研究会発行*études françaises*、第8号、1968.
○　遠藤周作：「情慾の深淵」(『カトリック作家の問題・宗教と文学』所収)、「遠藤周作文学全集」第10巻、新潮社、1975.
○　遠藤周作：『キリスト教は肉欲を否定するか—「モイラ」をめぐって—』、主婦の友社版『モイラ』への〈解説〉、「キリスト教文学の世界1　J・グリーン　ジッド」所収、1977.
○　鹿島晃一：『『モイラ』論—恋意をこえる存在の影—』、上智大学フランス語フランス文学会発行*Les lettres françaises*, 第3号、1983.
○　長戸路信行：『ジュリアン・グリーン—『モイラ』の模様—』、千葉敬愛経済大学研究論集、第24号、1983.
○　浅野雅生：『Julien Greenの《Moïra》論』、帝京女子短期大学紀要、第4号、1984.
○　長野督：『『モイラ』の感覚描写』、早稲田大学大学院「フランス文学語学研究」刊行会発行「フランス文学語学研究」、第8号、1989.

〔付記〕この小論は1987年度後期、88年度前期フランス文学特殊講義「*Moïra*読解のこころみ」の講義ノートの一部を加筆修正したものである。作品からの引用に際して、福永武彦訳『モイラ』(人文書院版「ジュリアン・グリーン全集」第四巻所収)の翻訳を参照させていただいた。また、この小論の着想にかんして、上記の、Jean-Claude Joyeの研究書からとくに恩恵をうけたこと、さらに、ジョゼフの《violence》の分析に先立って、上に挙げた、Jacques Petitの二冊の研究書、および原田武氏の論考から多くを学んだことを明記しておきたい。